第Ⅱ部　まとめ

第Ⅱ部では、敗戦後の象徴天皇制がどのように形成されていったのかについて、皇太子明仁への教育とそのイメージ形成を通して明らかにしてきた。

皇太子は 11 才まで軍国主義が吹き荒れる中で教育を受けてきた。しかし、その教育自体には軍国主義の影響は少なく、軍人にも任官しなかったために、皇太子は戦争のイメージを背負わずにすんだ。また、教育内容も初等科の間は学生との交流を重視する方針であり、将来の天皇に必要な特別教育はまだ行われていなかった。そのため、敗戦時においては、教育においても、メディアでの皇太子像においても、固定した形が決まっていない状態であった。

敗戦後、GHQ の方針により「御学問所」での特別教育ができなくなったため、皇太子は民営化された学習院の中で、他の生徒と同様の教育を受け続けることになった。そして皇太子への教育は、天皇の退位の可能性が無くなったこと、また天皇の地位が、統治権総覧者から、政治においては形式的な「象徴」という存在に変化したために、天皇になるための特別な教育というよりはむしろ、「模範的な人間」といったような人格の陶冶を中心に据えたものになっていった。また、宮内記者達による皇太子についての報道も、皇太子を「象徴」というよりはむしろ一人の「人間」として描き、友人達と「平等」に扱われる姿を報じていった。この「人間」として教育され、報じられたことによって、皇太子は国民から親しまれる存在であると同時に、ゴシップの対象にもなっていくことになった。

皇太子教育の中心を担った小泉信三は、この新憲法下の象徴天皇制を、皇室を政治社外に置くべきとする福沢諭吉の「帝室論」や英国の国王の立ち居振る舞いを描いたニコルソンの『ジョオジ五世伝』などから解説した。そして、この皇太子が学んでいる象徴天皇制の解釈を雑誌や単行本に掲載し､国民の前にあるべき象徴天皇制の姿を提示しようとした。また、ヴァイニングや小泉といった皇太子側近達は、自らが筆を取って皇太子の「真実」の姿を描くことによって、自分たちの発する皇太子像へと世論を誘導しようとした。しかし、皇太子を描けば描くほど、週刊誌をはじめとする様々なメディアによって、さらなる皇太子の「真実」の情報を求められていくことになるのである。

皇太子は敗戦後の混乱状況の中で、「一人の人間」として教育され、また「一人の人間」として教育された「イメージ」を付けられていくことになった。そのため、皇太子に込められた「象徴」という言葉の内実は、「立派な人間」という皇太子個人のパーソナリティにのみ依拠されていくことになるのである。